

## 特別支援学校における教科教育学的研究

— 学部間の連携による教育課程づくり —

### A study of curriculum of a school for students with special needs

渡邊 貴裕\*・丸井 曜子\*・原田 純二\*・小島 啓治\*  
尾高 邦夫\*・國分 充\*\*

Takahiro WATANABE \*, Yoko MARUI \*, Junji HARADA \*, Keiji OJIMA \*  
Kunio ODAKA \* and Mitsuru KOKUBUN \*\*

東京学芸大学附属特別支援学校

#### 要 旨

生涯スポーツを意識した体育の教育課程をつくるための資料を得ることを目的として、球技に関して、学部間の連携・協同を図りながら実践研究を行った。対象は、東京学芸大学附属特別支援学校、幼稚部から高等部までの幼児・児童・生徒である。幼稚部と小学部では「投げる・捕る」といった基本的な運動技能をしっかりと身につけていくこと、さらに中学部と高等部では一人ひとりが持っている運動技能を実際の種目の中で活かし色々な球技種目を経験することを研究の主たるねらいとした。幼稚部では幼児のボールへの関心や、ボールの扱い方の広がりについて、小学部では事前・事後テスト（ソフトボール投げ）の結果や、ボールを投げる・捕るフォームについて、観察記録やビデオ記録をもとに考察を行った。今後の課題として、それぞれの実践の内容や方法をより広げていくと同時に、その評価方法についても検討していく必要性が指摘された。中学部では、バドミントンの教材づくりを通して「目標となる運動に似通った動き」を経験させ、それをどう配列させて必要な運動技能を獲得していくかを検討した。その結果、こうした活動を通して運動技能を身につけていきながら、教員や友だちとのやりとりの中で、相手にボールを上手く投げる（打つ）ことや、相手から受け取ることができたという成功体験を積み重ねていくことが重要であることが示唆された。高等部では、中学部までの経験をより「広げる」（多様な運動種目を経験する）という側面はもちろん、より「深める」という側面にも目を向けていく必要性が考えられ、そのためには単に教員から生徒に活動を与えるだけでなく、今回の実践にもあるように生徒一人ひとりが「自分はどんな種目を、どのように楽しみたいか」を明確にする機会を学習の中に位置づけていく必要性が示された。

キーワード：特別支援学校・教育課程・体育

---

\* School for children with Disabilities attached to Tokyo Gakugei University  
\*\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)